

西遊記  
學校圖書

東京  
學校圖書

明治  
28  
年  
卷

西遊記譚卷之四

二月十四日長崎を發して三里時津に到り十五日朝船

大村領龜浦と云ふ小島に到る程に船と

出で又小串と云ふ小島に到る程に船と

出で又小串と云ふ小島に到る程に船と

出で又小串と云ふ小島に到る程に船と

出で又小串と云ふ小島に到る程に船と

出で又小串と云ふ小島に到る程に船と

出で又小串と云ふ小島に到る程に船と

六八七五蔵書

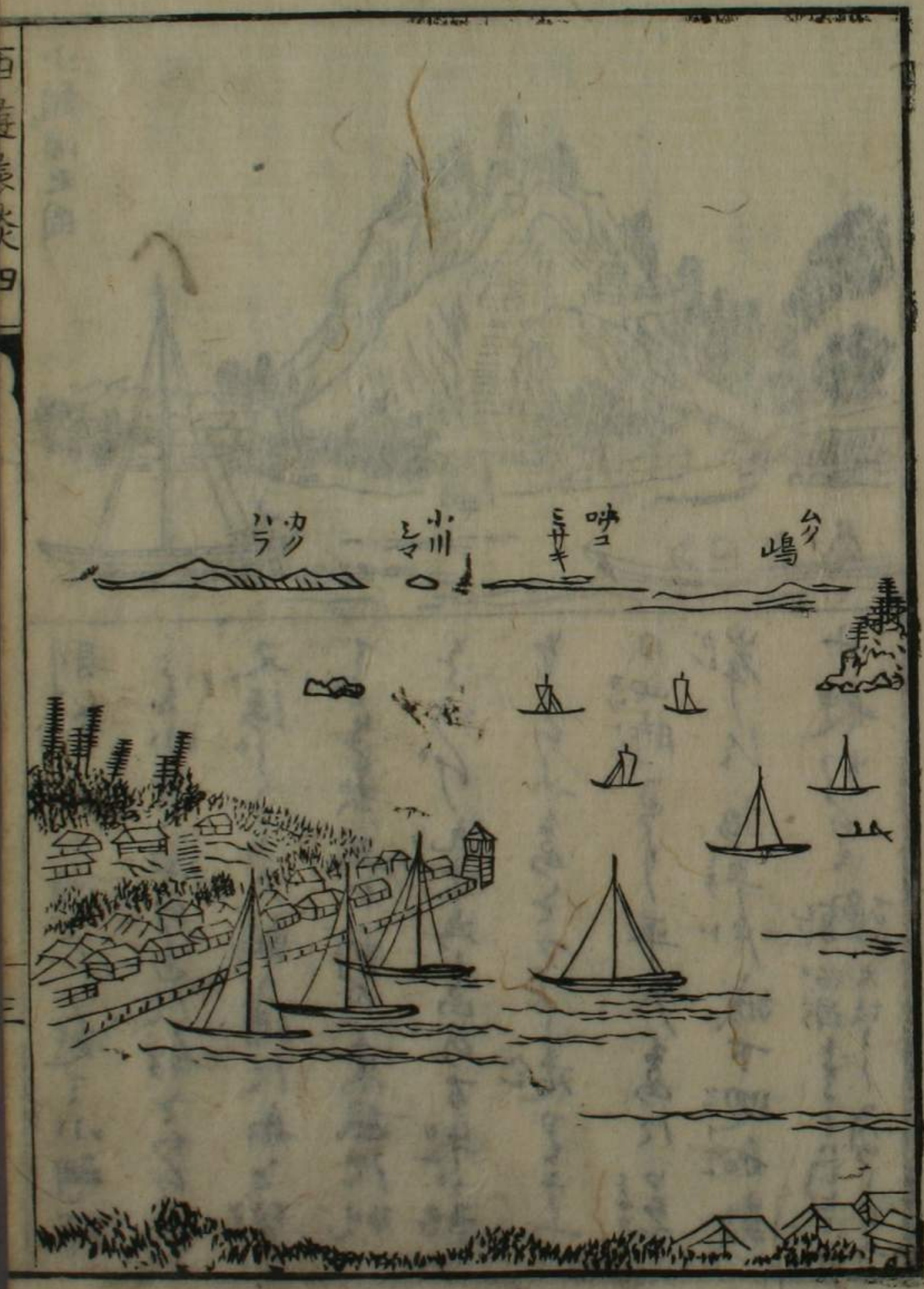
西遊記

向所長崎の方々



西ハ白波ホクタクウ飛トシで沸湯  
 のみ湖ウホニチ海シチをシチおと  
 末干湖ヒシキにシラズ乗





百選長火口



平ヶ埦下  
勝青山ヨリ  
眺タル圖

五選長火口

小鯛浦之図



則針尾の瀬戸を越て小鯛浦  
 小島に七時にて船をかけた  
 又ほろろ大鯛浦に船を留  
 ては秋丑の刻に東風に帆  
 をあげ九十九島の石牛首  
 をつらふ島をへて走つて七  
 日四時より平戸島に  
 岸に毎年戸城下廻船敷  
 十艘かゝる

西國をよこしハビト  
 大坂よりツツと

江戸を越て船をかけた  
 下関より夫より防州灘  
 をくぐる阿波の鳴門瀬戸  
 をくぐる志戸の岡鳥羽  
 浦より伊豆の東海をへて  
 七八日して江戸にきた  
 小田原町又船中滞事  
 朝ハ伊豆の秋の海をへて  
 平戸より五六尺廻船瀬戸  
 大根赤蕪の葉冬をへて  
 雪霜稀く赤大根赤蕪の  
 葉冬をへて

此島煖む  
 橙ガボン

食事四度にかゝる

平戸城下觀音院の地内鐘のり支那より渡りて云々  
 貞に支那物に播州尾上乃鐘と同物なり云々  
 親善堂より小松重盛の親善と云又阿部宗任の塚あり  
 昔と和蘭及イギリスより此島に船と入りて  
 園の屋今より石を築くヤシと海と市街なり  
 橋石をめぐりて長崎の如く昔西洋の人  
 寺の開基支那俗より今に此日を祠と  
 俗家にあび候等搗臼

観音院地内鐘之圖

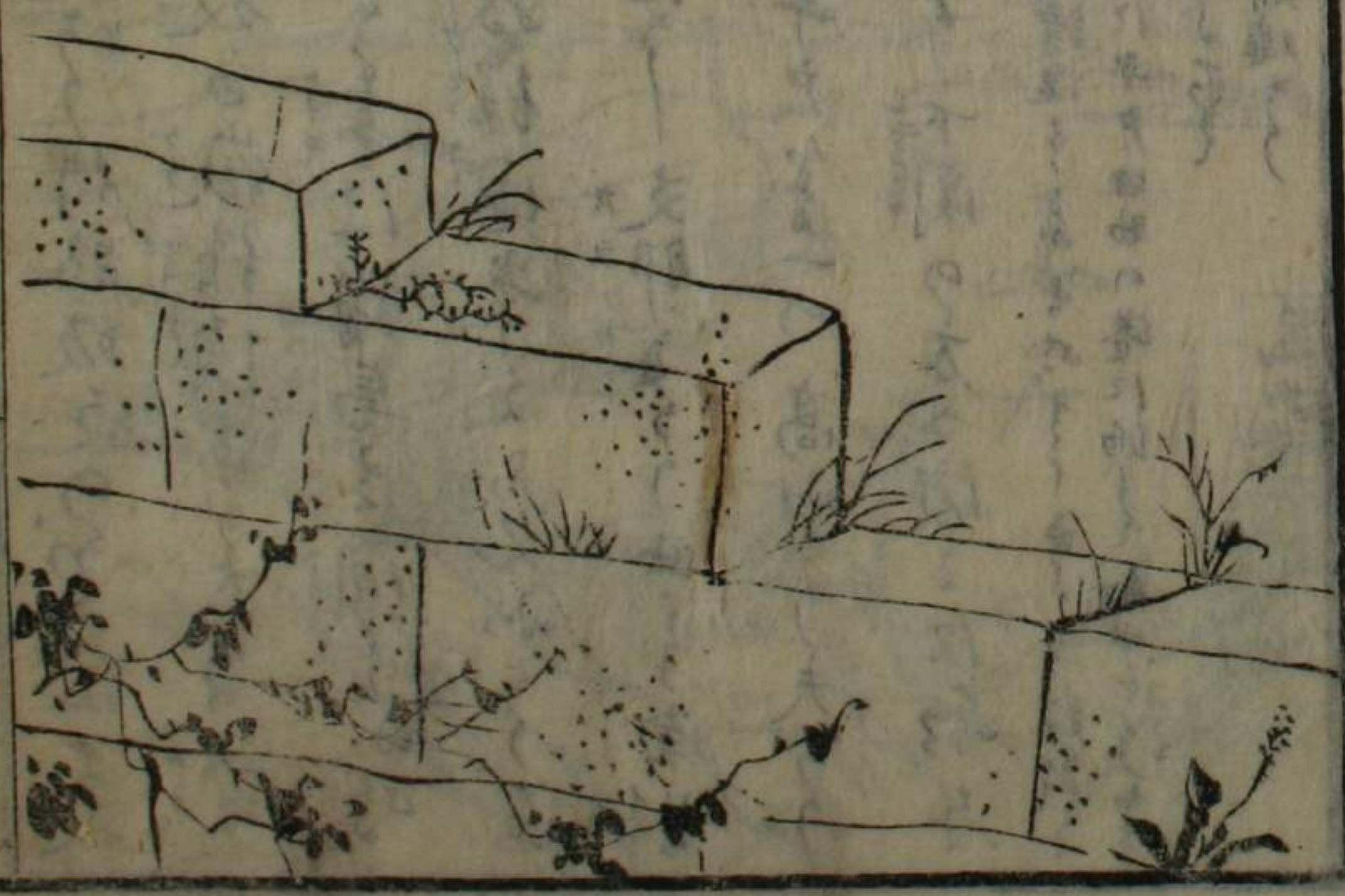
阿蘭陀牆



聖護院御願所平戸島觀音院  
 奉施入鐘一口應永十二年未  
 十二月日彫り



天人樂器を鑄り



平戸城下より一里北の方白山嶽シラカミ行路坂をのり山より入  
 紫シバの樹キナ馬乃牧を放白山嶽シラカミ頂より大島宅オオシマ  
 島シマ眼下カシカに八重ヤエに幸州イキシウなるるる幸トウキに對馬をアイノ問ヨ水路  
 ニつま布太フウカ髪カミと西水ハルカ邊に新羅國テウセン常々ゴク見えおとる  
 の方トカラシエ斑島トビシマ唐津カラハシ乃西の方日本の地カラノ支那ナニ海より西より南  
 月島ツキシマと西ニシにおる新羅テウセン平戸第一の高山より夫より  
 嶽タケをノり田助タヌケ浦ウラなるるる下関シモセキの方へ渡るに船を  
 かけの港キナト 一ハツ方カタ濟セイ日本房州ニッポンボウシュウに漂ウラベ流ハるるをサシて通スるニ經キ路ロと  
 の圖チより余オノ換カ寫シすはるる余の國オノクニなるるる  
 山ヤマより眺ノゾミる景ケイはるる國クニ中にナカニく画エくルの齋サイ樓ロウなり



西遊記卷四





十二月四日朝風行り城下より一里山を越薄香浦に到り此浦より  
 舟を出り舟人五人ありて移りて舟をこぎて行りて舟に須  
 草といふ所ありて入此所納屋一つありて舟に余人家  
 あり又納屋より舟に余生月ありて海上三里濤大は  
 舟中へ衣服を絞日暮漸生月ありて若くは舟にありて  
 十二日 二十日



阿子貝之圖  
 真珠ハ此貝ヨリ  
 出ル  
 此は阿子貝ノ  
 又伊勢ノ  
 海ノ中ニ  
 見ユル

須草

此所  
 城下  
 後田  
 の脇也



須草  
 の  
 出  
 所  
 之  
 圖





生月島之圖 亘三里



五日四時より孩子山嶽に  
のぼる路田夫乃家行り石を圍て  
登りしる金と作る世町登り  
絶頂ふま隙にき見喜人  
の曰一年兩三度にあは  
西の方景色国と  
るしる一即  
支那の地し



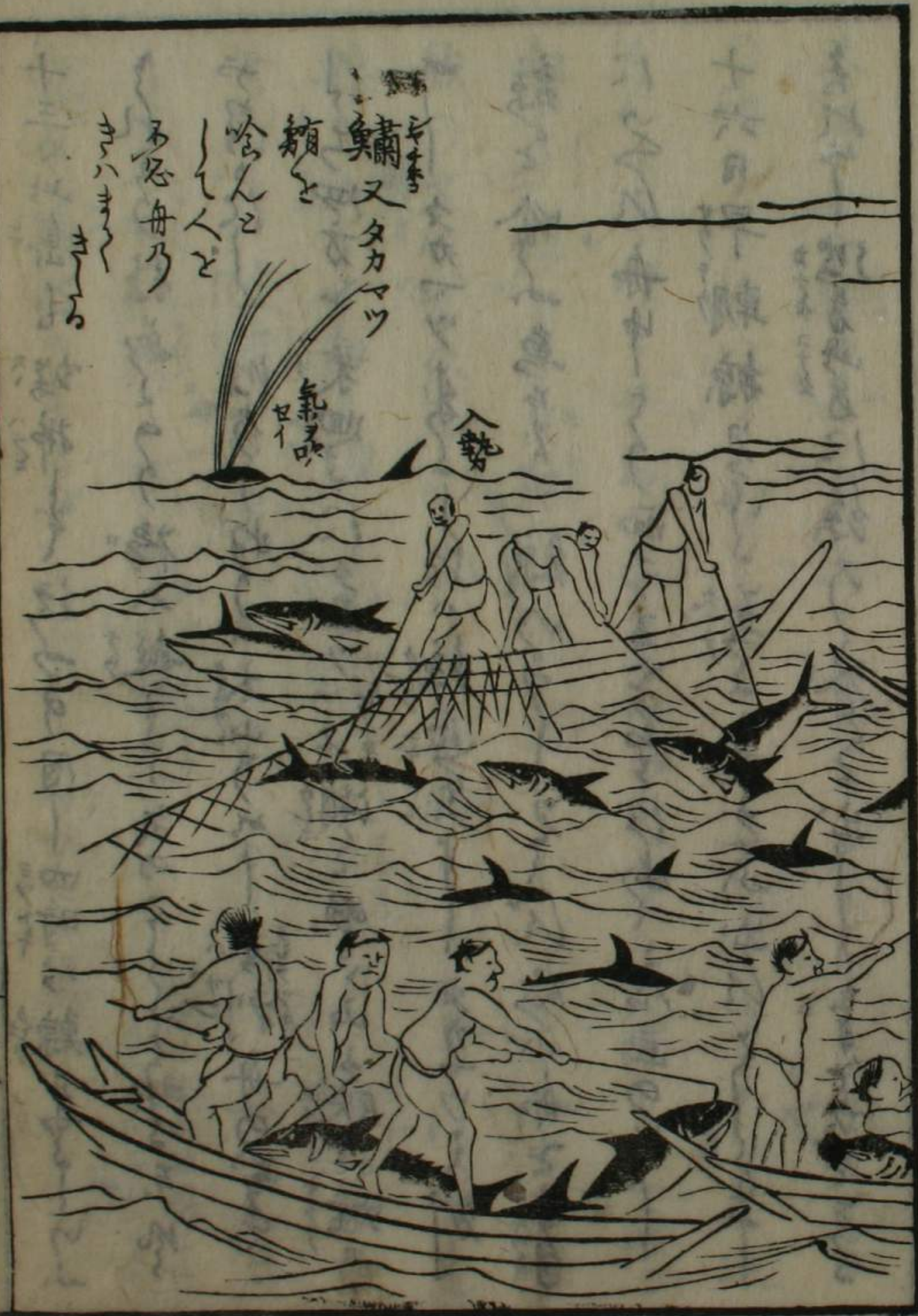
ヤ、ガケ  
孩子山嶽ニ  
登りしる  
来しる如し



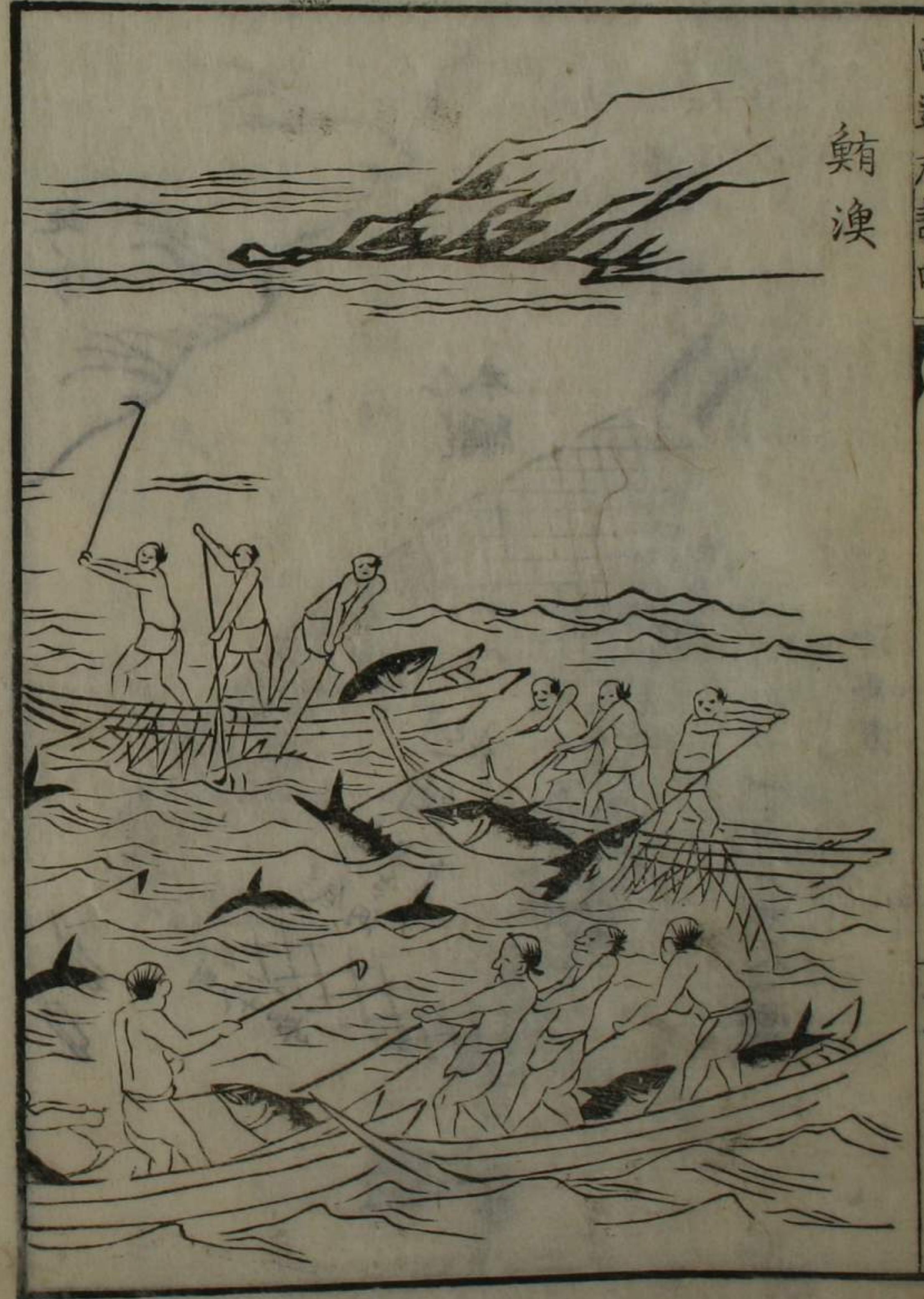
西遊補談四  
五日四時より孩子山嶽にのぼる路田夫乃家行り石を圍て登りしる金と作る世町登り絶頂ふま隙にき見喜人の曰一年兩三度にあは西の方景色国とるしる一即支那の地し



此を海中より龍の天に昇事龍昇人々す於き海波  
 乎珠の如く捲りて天よりハ黒雲降其雲はとくると  
 ど彼多うりてかより天上とて舞とらる魚の尾乃其  
 もれ雲れ中よりさがる即龍の尾より放り此鳥のまは  
 龍の昇とて龍の尾云漁父イノウ八日此を山より  
 杉本とて不箱漁とる龍の尾を月山より  
 岸とむりてさきさき山に山の網に網と布一網  
 二三百或四五百大漁とて龍を千も入す  
 鮪網之圖



鮪漁



十三日此島も煤拂とて流つる日一四時以鯨あり  
 くれり鯨船より揚八艇一矢のこころを風  
 ちりたりと流るるなりハ太山乃ハ一主刺舟のおとこ  
 うち四方と乗廻りたタカツ一名潮とぬき山と映し煙乃  
 一タカツあると流ハ鯨船と一タカツと別  
 鯨を喰ふ魚なり鯨ゆりてるに放ふ舟と生身  
 に之舟中より西の方とゆり山と唐画のや  
 十六日早朝鯨をゆり直し舟を出るに  
 夫れハ一船方此舟に鯨乃脊と出ると一とつとる

夫より舟ハ鯨のる方追て走尤平戸島と生身島乃  
 の海より鯨ゆりてるに一舟と生身島の方追  
 らんとす時ややとる大島乃沖と一舟の  
 船より鯨を食真鯨とゆりてるに四方の舟  
 鯨の方にゆりてるに十艘よりなるに  
 鯨をゆりてるに海に巨鯨乃大洋海に飛動する  
 とるに波濤山のや一舟と乗し舟と乗し  
 といふに舟と乗し日と乗し初更なるに  
 岩乃船のまじし舟と乗し

百五十五

三

鯨漁之圖

鯨は此の海に  
あられなきと吹別  
夫こそく真鯨を  
扱ふと吹別凡尾  
と出づと吹別海  
底へ入



鯨舟ハ二十艘と出  
す其の海に舟づる又  
網をよみ出れ雙海と  
名づく  
一結とよみ網舟二艘と  
通舟二艘とよみ此の海に  
三結と出れ之結の海に  
六艘網舟ハ大船とよみ  
是網と積おさる

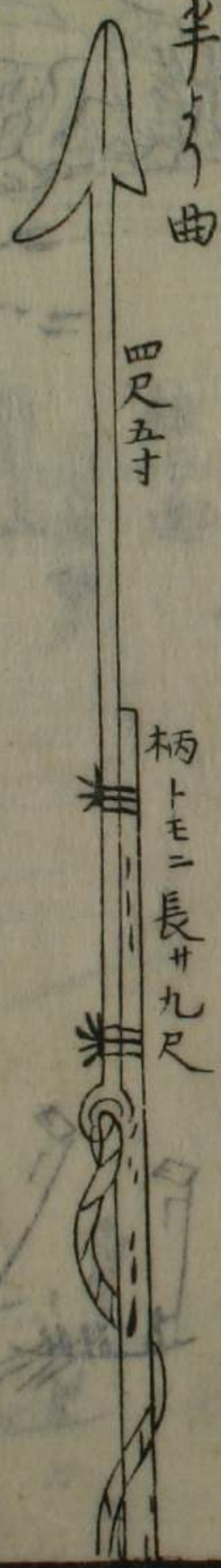






と止トジ心余ヨ此海シめまは鯨ゲイリ漢オホキの越カサと心カサ刺カサと執カサ子カサ大カサカコノモノ  
 の傷ケガレ越カサの戦セウゴク團カサ人カサの心カサは鯨ゲイリ乃カサ血ケガレ流カサ出カサ朱カサの色カサと心カサ  
 別カサ大島カサの沖カサ平戸カサの根カサ向カサ海カサ島カサハマ岐カサの團カサ對馬カサ遠カサに  
 朝鮮カサの大カサ海カサうカサ鯨カサハカサ潮カサ初カサ更カサ色カサ之カサ心カサカサカサ所カサカサ  
 潮カサと鯨カサ乃カサ半カサと隠カサカサカサ全體カサハカサ夜カサカサカサ所カサカサ  
 中カサカサカサ是カサカサカサ潮カサ午カサて全體カサと海カサ月カサの光カサカサ  
 大カサ十カサ間カサ餘カサの世カサ美カサ鯨カサ也カサ世カサ美カサハカサ鯨カサ刺カサ又カサ之カサ筋カサ口カサの  
 時刻カサカサカサカサカサ半カサ此カサ島カサハカサ兩カサ之カサ及カサカサカサ  
 此カサ全體カサと心カサカサカサもカサカサ稀カサカサカサ

魚エリ鯨カサ之カサ圖カサ又カサヨカサロカサツカサ此カサ製カサ生カサ鐵カサカサカサ作カサ鯨カサ刺カサ入カサ細カサカサカサ

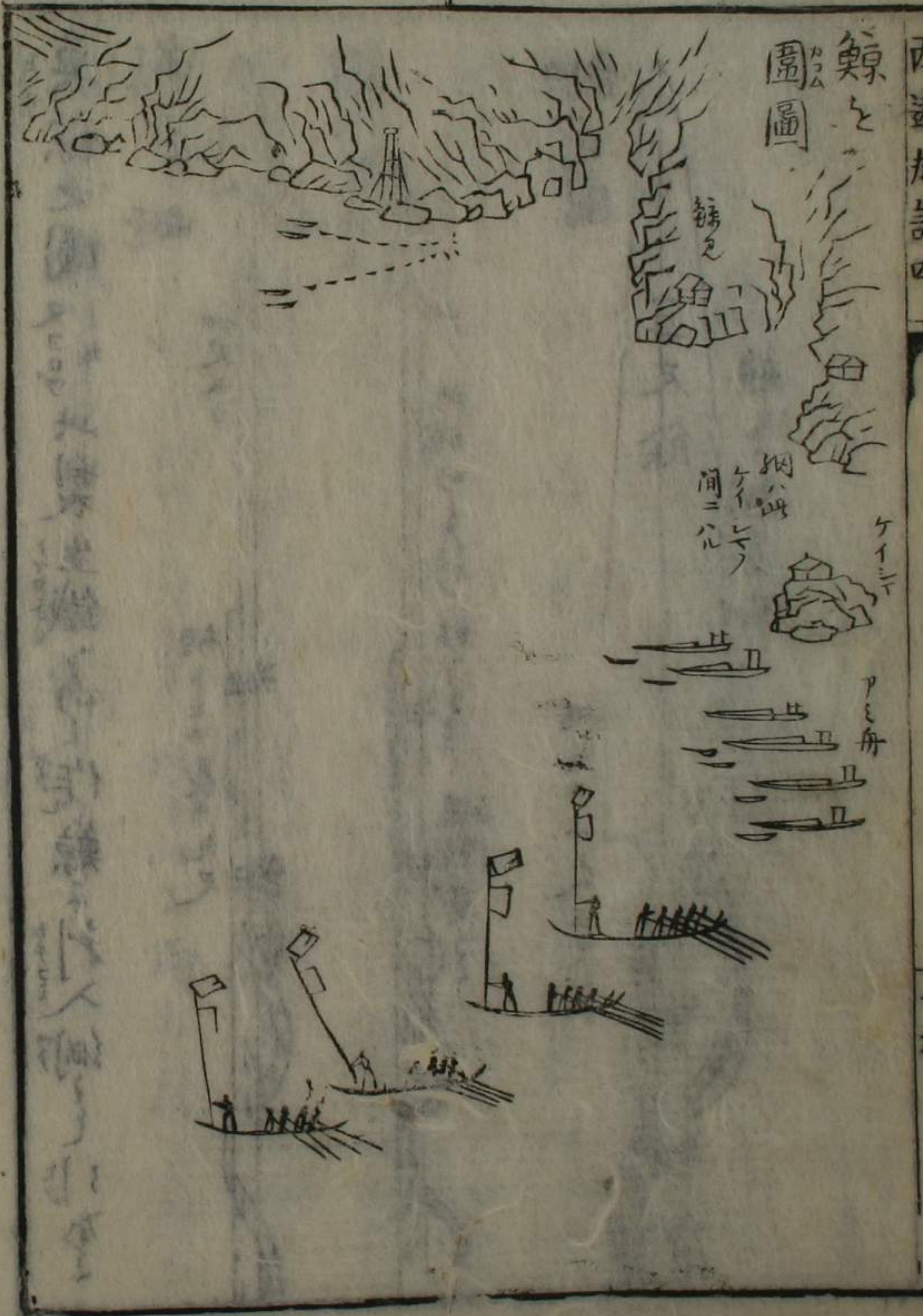
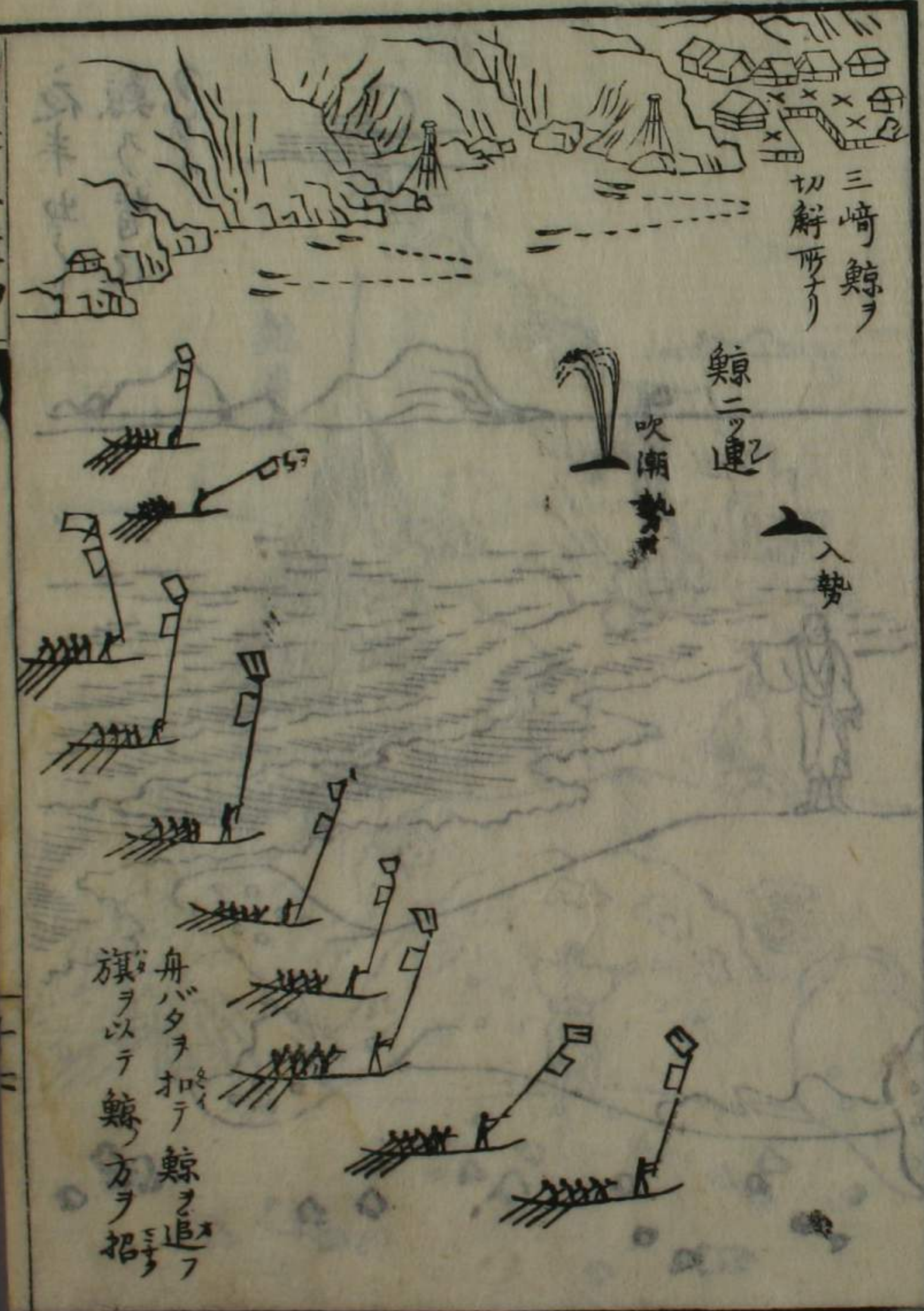


同ハヤトキ  
 此カサ兩カサのカサもカサカサ極カサ刺カサ具カサカサカサ



劍ケン之カサ圖カサ  
 鯨カサをカサ殺カサ具カサ也カサ  
 柄カサ共カサニカサ一カサ丈カサ三カサ尺カサ余カサ

西遊記卷之四



西遊記卷之四



鯨番人

夜半ゆゑ  
鯨乃背に  
のびる





肉<sup>ニク</sup>納<sup>ナ</sup>屋<sup>ヤ</sup>  
 腸<sup>ハラワタ</sup>納<sup>ナ</sup>屋<sup>ヤ</sup>  
 骨<sup>ホネ</sup>納<sup>ナ</sup>屋<sup>ヤ</sup>

鯨切解圖 此所ヲ三崎ト云  
 鯨大腸と骨とを切解  
 又骨解の臭くろくを  
 小海老とつりしめする  
 又鯨鯨とつり  
 万力車 ヤチ 七ヶ所<sup>ニ</sup>在  
 大綱とつり捲き

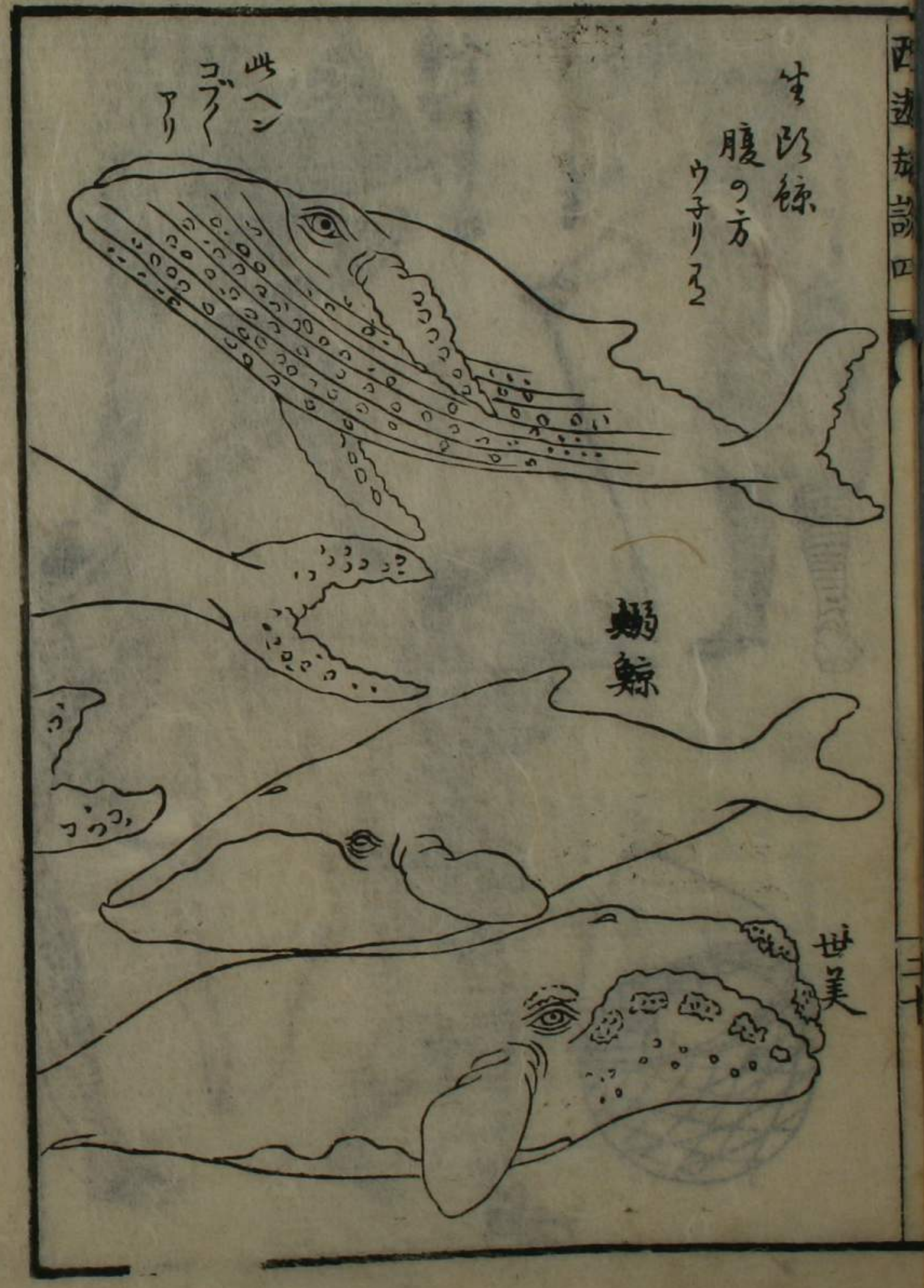
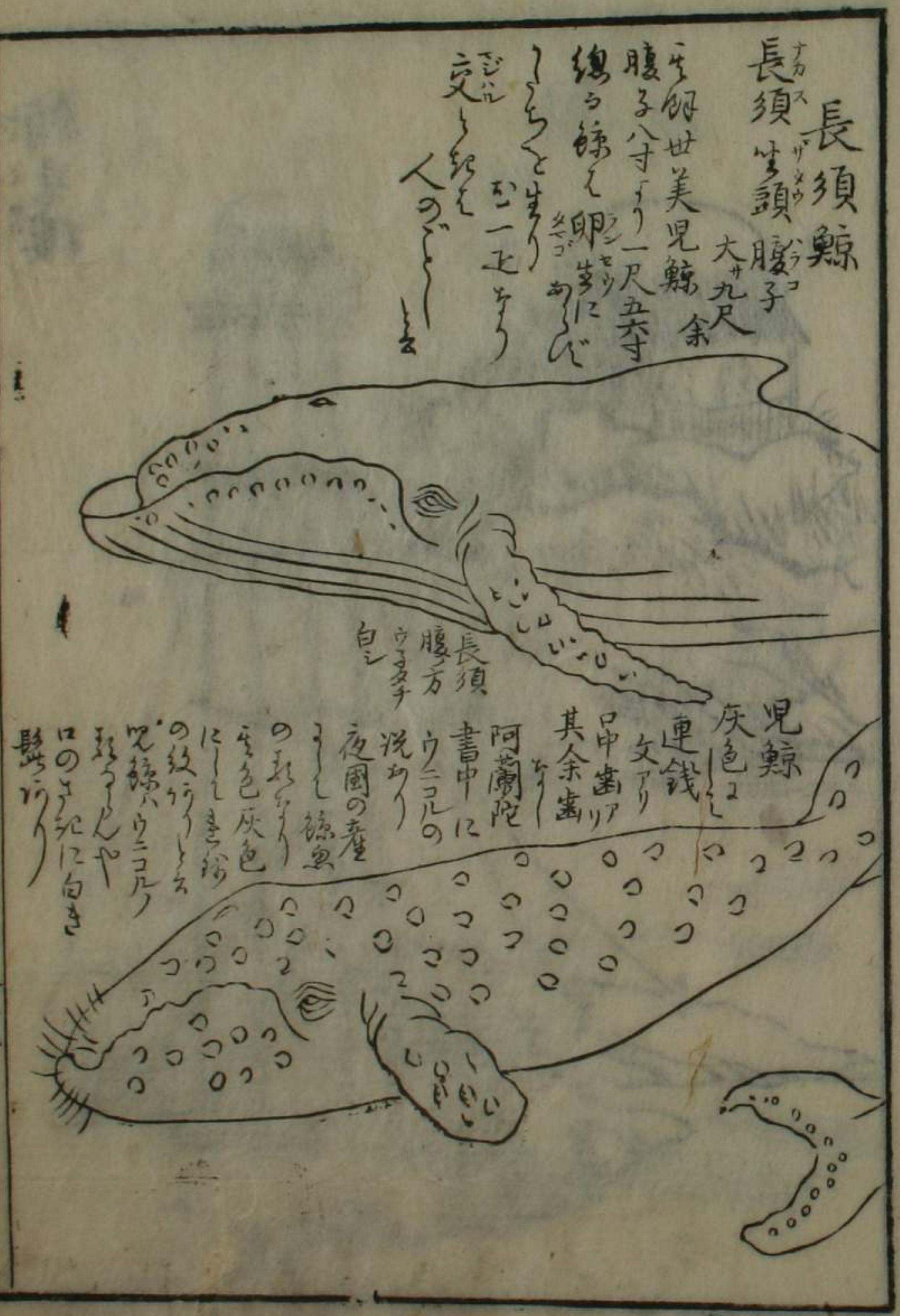


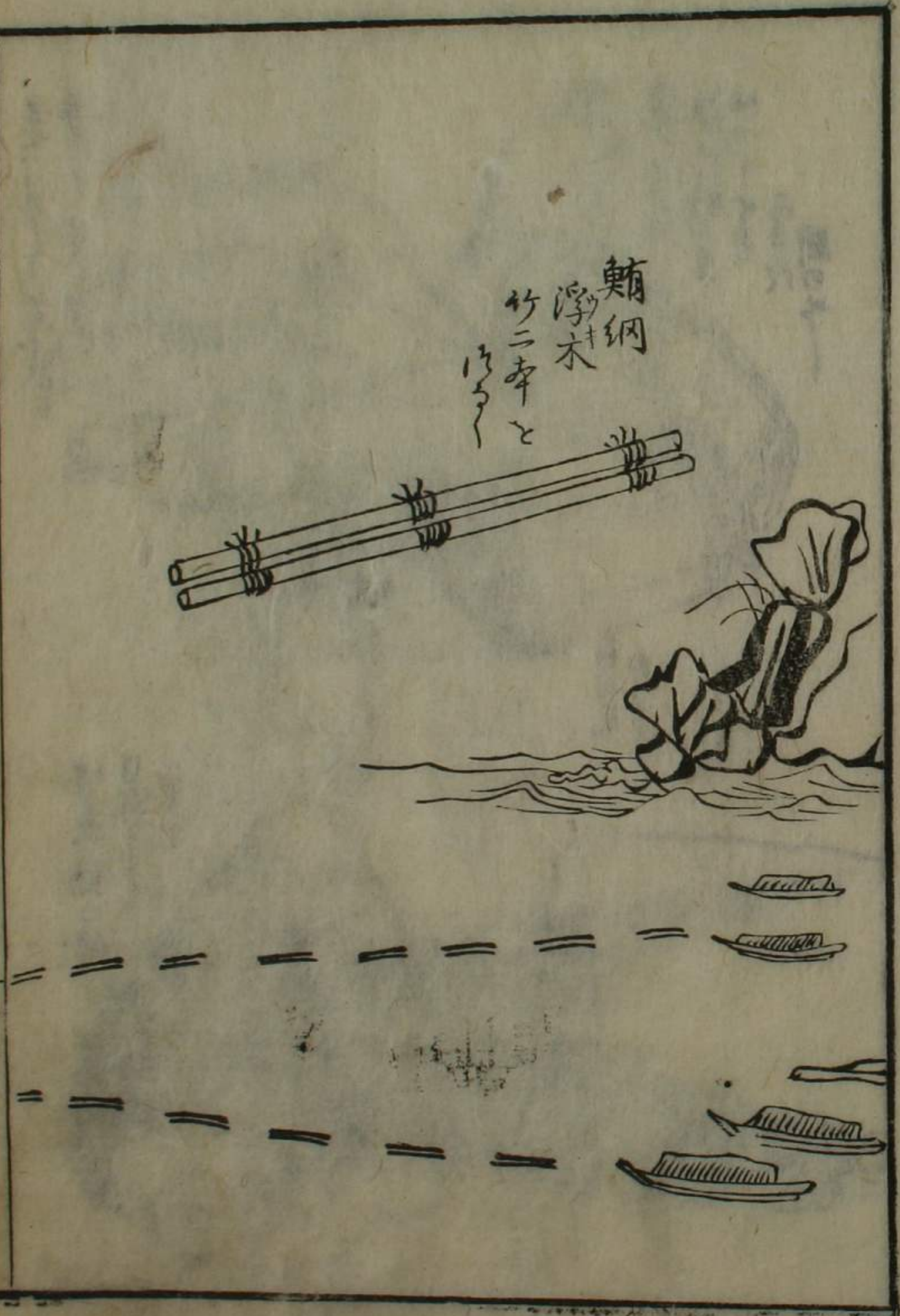
見元島

ライ島



胴骨  
 肉骨と細骨は此  
 此島々々所産の鯨祝五品有り  
 世美鯨 上品味美大なるもの十間油或百樽と出  
 長須鯨 中品味淡初等ありし頭海上後入底走  
 中品少剛し又ゆるき味同長頭  
 下品剛極にし骨ごとく舟と破る  
 下品ゆるき事稀なり鯨の名にし弱ありん  
 右各象異也予見所のもの世美生頭の二品をこそ解す予見





Ukiyari  
Ukiya  
Uki

鯨見樓



Kujirigami

鯨見樓  
上には  
舟を  
出さ  
し  
て  
見  
る







竈十八テ油ヲ  
煎ル  
鯨十間ノ  
もの油二百石  
と出ル



肉納屋  
之圖

役人



骨納屋之圖  
又ウラ納屋ウラ

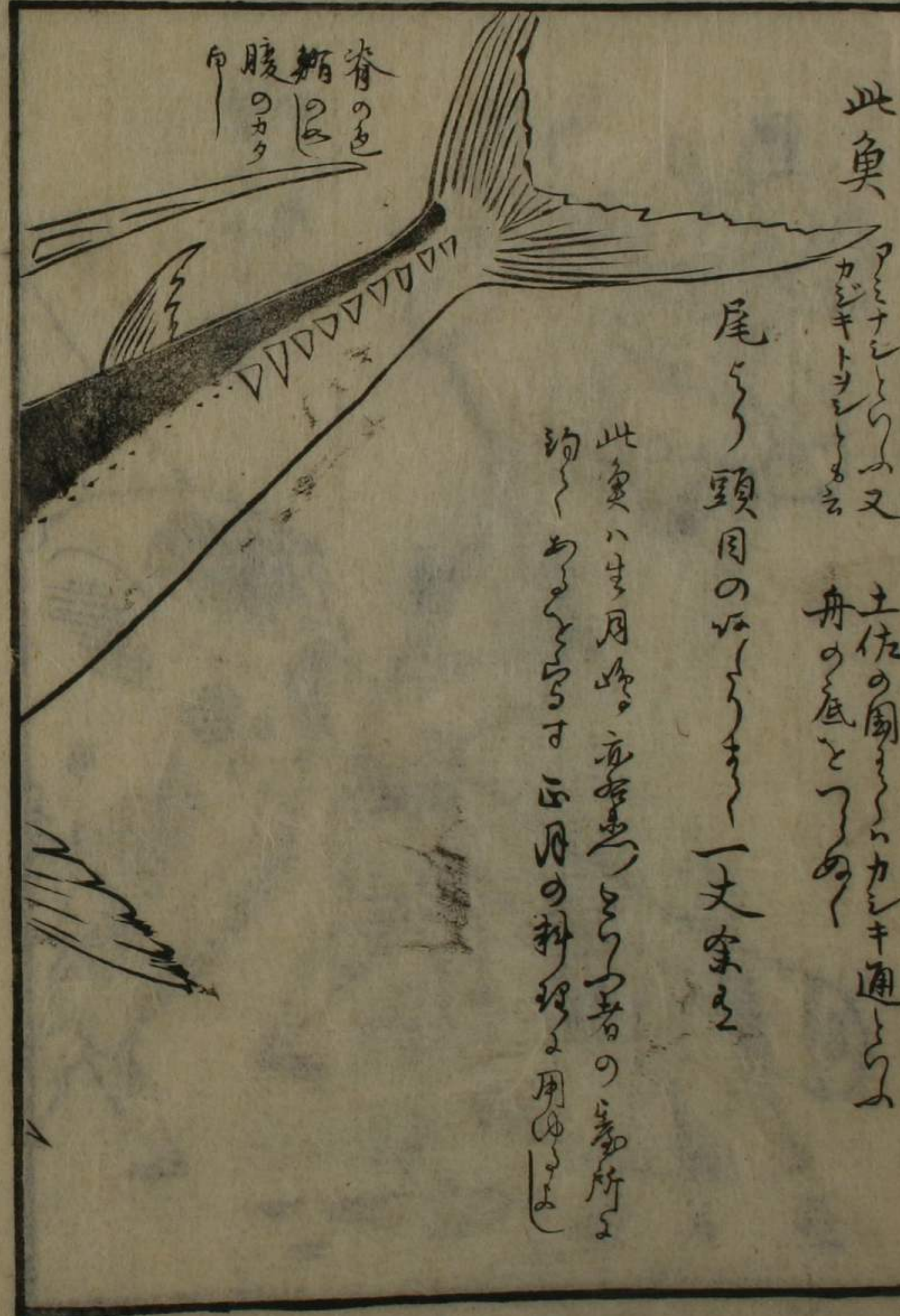
此魚

アミナシ  
カシキトシ

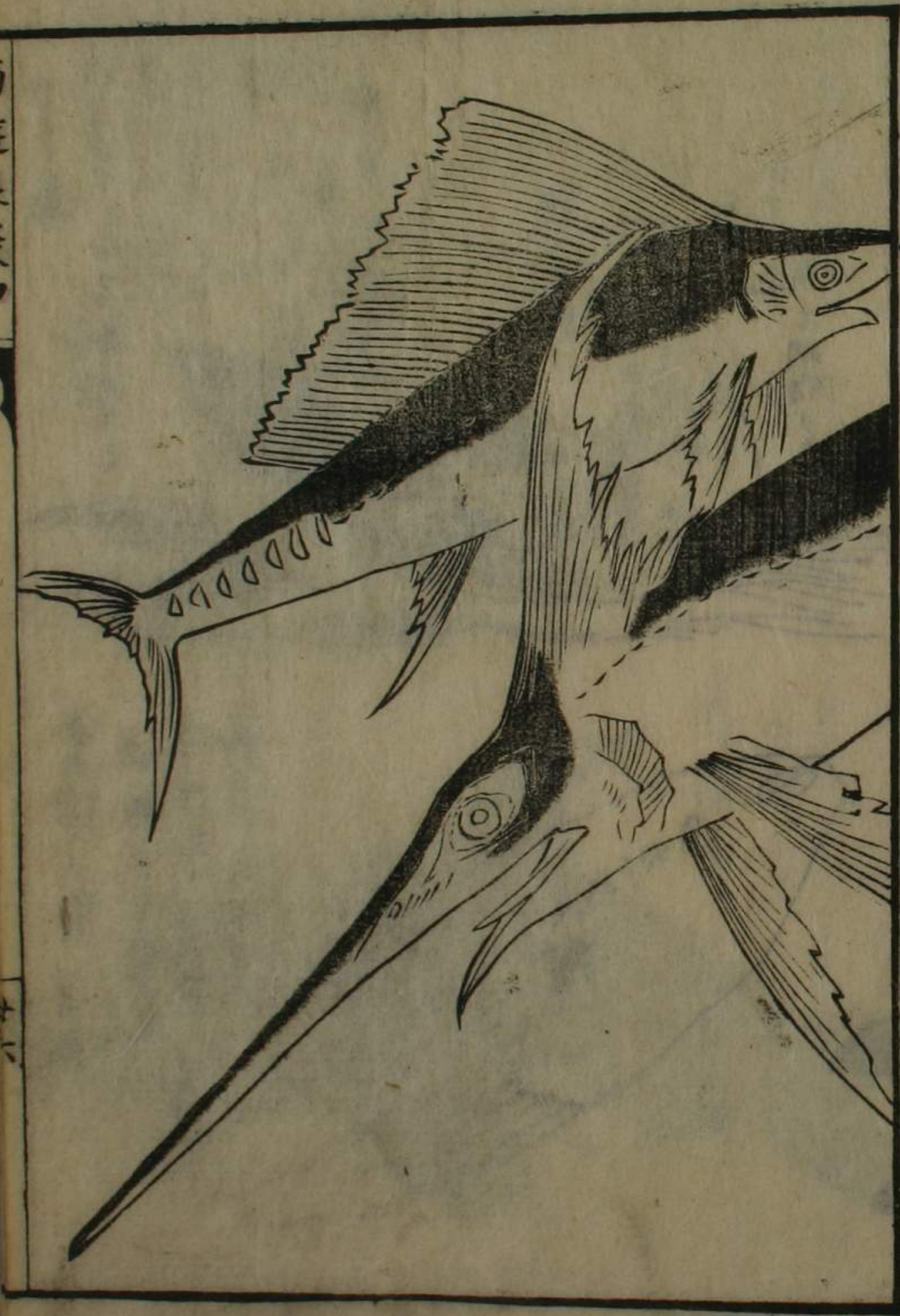
土佐の國  
舟の底とつ

尾 頭目の

此魚は生月... 舟の底とつ



脊の色  
腹のカタ



ライ鳥

此鳥幸々ある鯨魚の  
肉を喰ふ事  
鯨の肉を喰ふ事  
此鳥幸々ある鯨魚の  
肉を喰ふ事  
ハ歩半ありん



頭ウス黄

此鳥生胭脂ウス色

夕カワノ歯 一名鱧

鯨魚と喰ふ也  
此歯とお歯  
減るに動り



此圖ハ此島の漁父に尋く  
海中に湖を吹火を  
又了くても金龍と  
世美鯨と同一湖と  
くくも世美の妙を

夕カワノ  
一名シヤチホコ  
大廿二間余



扱圖より所乃 錦旗ハ余通一ス其の之と知ルみ見ものハ  
~~~~ 毫毛も嘘言なり 文章と毎夏にせぶ所の事  
~~~~ のハ五島平戸は紀州島野浦備前島野浦浦備前島野浦十六五ワ  
津父の御師は近里の御師様の人身體とスル者ナリ  
知られども五島を城下と云ふ事ハ九里の地ナリ平戸  
も同五六里又ハ十二三里と云ふ事ハ縁海にコシ極月  
々ハ正月朔日尤遠くモスルハ少事ナシ格と抑者  
ハ人刺子一人他の者ハ事ナラシメ縁海舟を修メ  
多ハ舟露舟露水練水練と云ふも命をスルハ海に

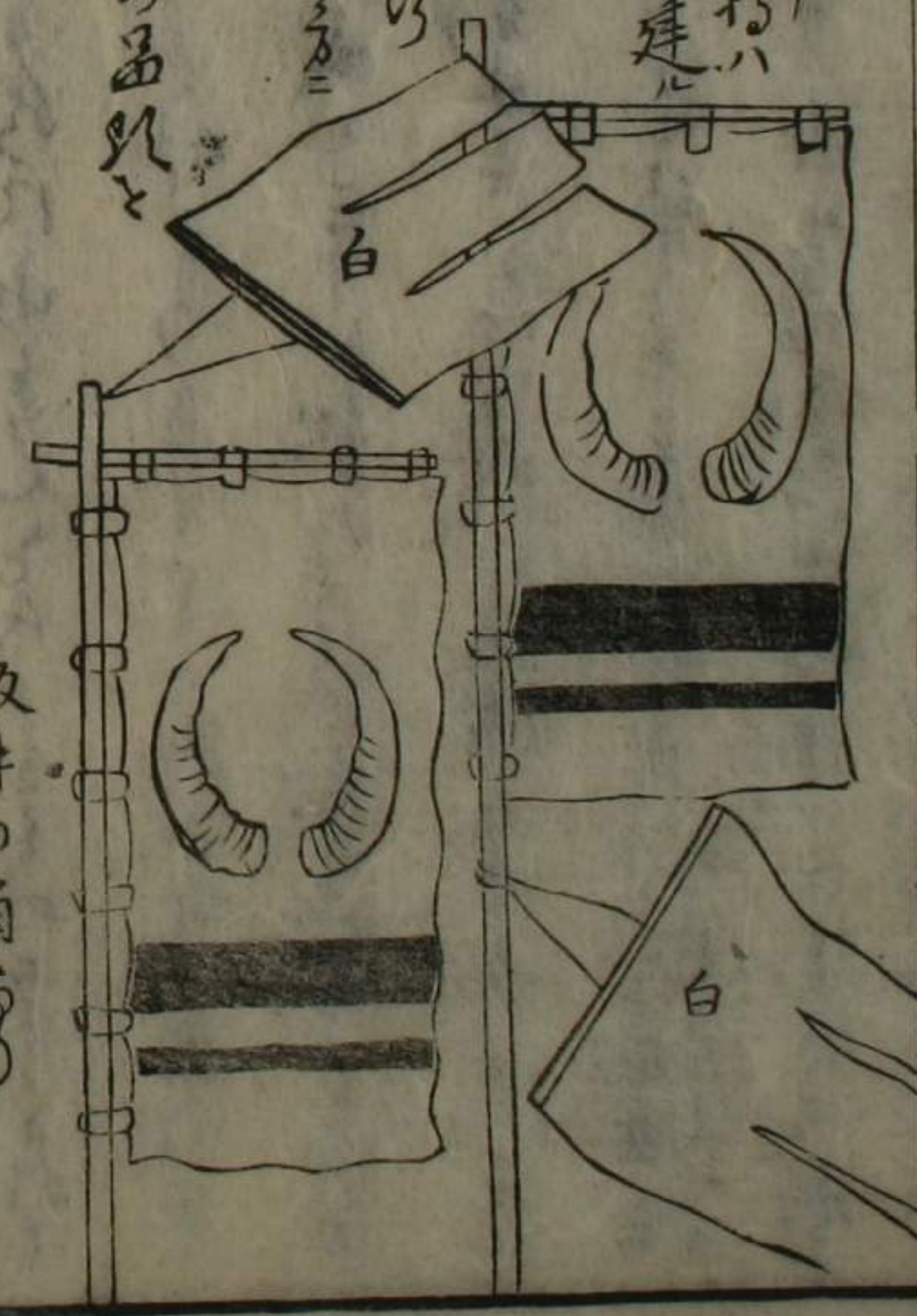
切少切少海邊に育リ身に水人水人と云ふものナリ  
ハタシハ傳のハタシハ巨魚巨魚ハ~~~~ の事ニ放メス者解  
~~~~ 遠狭遠狭と云ふもの成と三千を穿テ~~~~ 峯峯と云ふ  
扱出扱出んとスルコト余嘗平戸島に渡リ松浦彦の命命ナリ  
生月も益富又おもつて宅に~~~~ 事ニ十日  
~~~~ 録録事ナリおもつて~~~~ 好好事事~~~~ 其其に  
~~~~ 此處をスル  
元日此處を門門ナリ~~~~ 雜雜煮煮といハル事ハ~~~~  
四日此處を歩歩~~~~ 平戸島の方白嶽白嶽の方に乗乗終終録録敷

丈に深<sup>フビ</sup>く<sup>テ</sup>赤<sup>ベニ</sup>壁<sup>カキ</sup>く<sup>シ</sup>鯨<sup>クジラ</sup>の<sup>ク</sup>角<sup>ツノ</sup>と<sup>シ</sup>油<sup>アブラ</sup>水<sup>ミヅ</sup>と<sup>シ</sup>了<sup>マツ</sup>に<sup>シ</sup>了<sup>マツ</sup>  
 岩<sup>イハ</sup>壁<sup>カキ</sup>赤<sup>ベニ</sup>大<sup>ダイ</sup>楮<sup>コ</sup>石<sup>イシ</sup>の<sup>ノ</sup>角<sup>ツノ</sup>と<sup>シ</sup>油<sup>アブラ</sup>水<sup>ミヅ</sup>と<sup>シ</sup>了<sup>マツ</sup>に<sup>シ</sup>了<sup>マツ</sup>  
 乗<sup>ノリ</sup>舟<sup>フネ</sup>此<sup>ノ</sup>夫<sup>コノ</sup>と<sup>シ</sup>舟<sup>フネ</sup>と<sup>シ</sup>出<sup>デ</sup>て<sup>シ</sup>平<sup>ヘイ</sup>戸<sup>コ</sup>城<sup>シロ</sup>下<sup>ノ</sup>に<sup>シ</sup>了<sup>マツ</sup>  
 田<sup>タ</sup>助<sup>タスケ</sup>に<sup>シ</sup>了<sup>マツ</sup>

鯨舟旗乃圖

長<sup>チカ</sup>須<sup>ス</sup>子<sup>コ</sup>持<sup>テ</sup>ハ  
 トモ<sup>トモ</sup>の<sup>ノ</sup>方<sup>カタ</sup>建<sup>タテ</sup>ル

勢<sup>セウ</sup>美<sup>メイ</sup>の<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>角<sup>ツノ</sup>と<sup>シ</sup>舟<sup>フネ</sup>の<sup>ノ</sup>  
 表<sup>オモテ</sup>方<sup>カタ</sup>建<sup>タテ</sup>ル<sup>ト</sup>頭<sup>カブ</sup>ハ<sup>ト</sup>トモ<sup>トモ</sup>の<sup>ノ</sup>方<sup>カタ</sup>  
 方<sup>カタ</sup>建<sup>タテ</sup>ル  
 皆<sup>みな</sup>旗<sup>ノボリ</sup>の<sup>ノ</sup>建<sup>タテ</sup>て<sup>シ</sup>鯨<sup>クジラ</sup>の<sup>ノ</sup>角<sup>ツノ</sup>と<sup>シ</sup>了<sup>マツ</sup>



鯨舟の角あり

